

# 「東干」「東干語」「東干人のバイリンガル」と 「東干学」について\*<sup>1)</sup>

胡 振 華<sup>2)</sup>  
犬 塚 優 司 訳

1. 「東干」について
2. 「東干語」について
3. 「東干人のバイリンガル」について
4. 「東干学」について

## 1. 「東干」について

「東干」は、19世紀後半、我が国<sup>3)</sup>西北陝西、甘肅、新疆一帯から中央アジアへ移民を余儀なくされた回族<sup>4)</sup>の末裔を専ら指す。彼らは「回回」<sup>5)</sup>、「老回回」<sup>6)</sup>、「回民」<sup>7)</sup>、「中原人」<sup>8)</sup>と自称しているが、十月革命<sup>9)</sup>以後、1924年の民族識別と民族行政区域画定時に、彼らの民族名称は政府により「東干」民族と定められた。「東干」という民族名称は法定のものである。中央アジアのいくつかの共和国は、独立を宣言した後、それぞれの政府は引き続きこの民族名称を用いた。

以前我が国新疆において、いくつかのチュルク語族の言語<sup>10)</sup>を話す民族の人々も新疆の回族を「東干」或いは「同干」とよく呼んでいたが、これは民間的な一種の呼称であり、政府による法定の呼称ではなかった。19世紀帝政ロシアの軍人やイギリスの「探険家」たちも我が国西北地区（新疆を含む）の回族を紹介する際、「東干」（或いは「東甘」と翻訳されている）という用語を用いているが、「中国ムスリム」という用語を用いることもあった。

筆者は、我が国中央部だけでなく、新疆の回族もみな「回族」と呼ぶべきであるが、「中央アジアの回族」については「東干」と呼ぶべきであると考えている。なぜなら、これは法定の民族名称であるからである。しかし、人々が異なる二つの民族と誤解しないようにするために、中国語においては「中央アジアの回族」という語を使って「東干」を説明することもできるであろう。

回族も一つの国境を越えて分布する民族であり、中国に回族がいる以外に、中央アジア各国、インドネシア、マレーシア、タイ、ミャンマー、サウジアラビアなどの国にも、人口の多少はあるが、回族人が住んでいる。国外の回族はみな中国から移住したものであり、彼らの中国国内における法定の民族名称は「回回民族」（「回族」と略称する）である

---

\* 本文は2003年9月25～27日北京で開催された「東干双語国際研討会」で発表した原稿であるが、それを加筆修正したものである。

が、彼らのそれぞれの国における法定の民族名称は多く異なっている。民族の区分を登録しない国もあるが、中国から移住してきた回族人はよく「華人ムスリム」或いは「華人」と登録されている。

東干人は、中国の中原文化を中央アジアへもたらし、中国各民族の人民と中央アジア各国の人民との間の伝統的友情を深める面において、重要な役割を果たした。

## 2. 「東干語」について

「東干語」に関する見方は、基本的に二つに分かれる。一つの見方は、東干語は、中国語陝西方言、甘肅方言を来源とするが、国外で百年以上その他の言語の影響下にあつたため、一つの中国語と並行する一つの言語に既に発展変化しており、さらに東干語のために文字も制定されているというものである。この見方を主張するのは主にロシアとその他の国家の中国学者である。もう一つの見方は、東干語は百年以上前中国語陝西方言、甘肅方言を基礎として、ロシア語、中央アジア諸チュルク語の大きな影響を受ける状況下で、発展形成された中国語の中央アジアにおける特殊な形態であり、それは依然として中国語の国外の地方方言であるというものである。新疆伊犁一帯の回族の人々のことばと中央アジアの「東干人のことば」<sup>8)</sup>は非常に似ていることが知られており、新疆伊犁の回族の人々の方言を中国語と並行する一つの言語とすることができないように、東干人が文字を持っているからと言って、それが既に中国語と並行する言語になったとすることはできない。中国の回族は早くからアラビア文字を用いて各地の回族の人々自身の口語を書き留めていた。回族の人々の中国語にはいくらかのアラビア語、ペルシャ語の語彙が使用されているが、中国各地の回族の人々が話す中国語は依然として漢族の人々が使用する中国語と同じである。

1955年、中央民族学院<sup>9)</sup>は、ソ連の言語学者 G. P. Serdyuchenko (謝爾久琴科) を招いた。筆者は、学院の決定により彼から言語学と翻訳学を学ぶことになった。彼はソ連の文字制定の経験を紹介するとき、特に「東干文字改革の経験」を語った。彼の講義はとても詳細であった。当時の筆者の印象は、「東干語は既に一つの中国語と並行する言語である」というものであった。筆者はロシア語ができ、中央アジアのいくつかのチュルク諸語もできたので、1989年5月、招きに応じて交流のためにソ連中央アジア東干族地域を訪問した。その際、自分が完全に「東干語」を聞き取ることができ、なおかつ1953年に筆者がキルギス語の学習、調査のために、初めて伊犁に行ったとき聞いた当地の回族の人々が話していた方言に、それがとても似ていることに気づいた。その後、また何度も中央アジアに行き、特に何名かの東干の歴史、文化と東干言語文字を研究する博士課程の学生を指導する中で、筆者は「東干語は中国語の中央アジアにおける一つの特殊な形態であり、未だ中国語と並行する一つの言語に発展変化してはいない」という信念を持つようになった。

キリル文字を基礎とする東干文字は、声調を表示せず、文字を読むときには同音語の問題のために意味の曖昧さが生じ、これが大きな欠点となつている。東干文字において三つの声調を表示する問題を解決しなければならず、音節の後ろに一つの文字を加えて表示することを考えるべきであろう。この提案を、中央アジアの東干族人民及び東干族学者の参考に供したい。

### 3. 「東干人のバイリンガル」について

東干族は、中央アジア各国において人口の比較的少ない少数民族であるが、いくつかの東干族が集まって住んでいる村には、東干族の中学校や小学校が設けられている。ここ何年か東干族の学校ではずっとバイリンガル教育が実施されている。すなわち、ロシア語と東干語を使った教育である。東干学校の状況から見て、主にロシア語により各種の課程が教えられ、東干族の言語、文学の二つの科目は東干語で行われていることが明らかになった。彼らはこの二つの課程のために特に『父母のことば』、『中原語』、『発音学と正書法』及び『われわれの文学』などの各種の教材を編集出版した。東干学校で使われる東干語の他に、国家放送局では東干語放送（キルギス共和国ビシュケク市）があり、現在東干語を用いた雑誌『東干』（ビシュケク市）と新聞『青苗』（カザフスタン共和国アルマティ市）が編集発行されており、また文芸関係の書籍も出版されている。

注意すべきことには、ここ十年来東干族はバイリンガル教育の面において新たな状況が出現したことである。

(1) 中央アジアの各共和国が独立した後、各国は主要な民族の言語を法律によって形式的に「国語」と定めているが、実際にはロシア語から離れることはできずにいる。こうなると、各国の東干学校では、少なくとも三つの言語を学ばなければならず、更に外国語を学ぶなら、四つの言語を学ばなければならない学校もある。筆者は以前東干学校の教師たちに「このように多くの言語を学ぶことは、学生にとって負担になっているのではないか」と尋ねたことがある。これに対して、「かつて学生たちはみな基本的に母語とロシア語をマスターした「バイリンガル」であり、更に外国語をマスターしていた学生もいた。しかし、今多くの言語を学ばなければならないというのは新たな状況であり、私たちはこのような経験を持っていない。」と答えた教師もいれば、「いかに科学的に多くの言語教育を進めていくかは、確かに今後注意して研究するに値する問題である。」と答えた教師もいた。

(2) 中央アジア各国が独立した後、各国と中国との関係は更に密接になり、往来は更に頻繁になった。各国の東干人の中国各地との結びつきも更に強くなった。多くの東干人は言語が通じるという有利さを利用し、ある者は行き来して商売をし、ある者は他の人のために通訳となった。このように、東干人が中国各地の中国語と接触する機会が多くなると、多くの東干人はしっかりと中国語を学びたいと考えた。そこで、ウズベキスタン共和国タシケント郊外の東干人が多く集まっている農村では、中国語学習クラスが開設された。今後この種の学習クラスは次第に多くなることだろう。

東干族は、バイリンガル教育からマルチリンガル教育へと発展し、これは我々に一つの法則を示した。すなわち、多民族の国に生活している人口の比較的少ない民族は、社会に適応するために、また生存と発展のために、一定の範囲内で自らの民族の言語を用いる以外に、その国の人口の比較的多い主要な民族の言語をマスターしなければならず、できるならば、更にその他の民族の言語或いは外国の言語をマスターしなければならない。

### 4. 「東干学」について

東干学は東干人の言語、文学、芸術、歴史、民俗、宗教、経済などを研究の対象とする

一つの学問分野である。これは回族学の一部であり、中国学、中央アジア学とはともに密接な関係を持っている。

早くも帝政ロシア時代に、ロシア人、イギリス人、フランス人が東干人の研究に注意を向け始めた。特に20世紀の30年代、先のソ連は、東干人の文字を制定するために、東干人の言語、民俗について調査を進め、一連の著述を発表し、いくつかの書籍を出版し、また東干族の知識分子を養成した。しかし、学問分野としての東干学は、20世紀の50年代前半、すなわち1953～1954年に発展形成されたと、筆者は考えている。

いかなる学問分野の発展形成にも、みな長い過程を経、一定の条件を備えていなければならないものである。東干学もまた例外ではない。第一に、東干族の様々な面を研究する、一群の専門の学者がいなければならず、その中にはその民族の専門の学者がいなければならず、更に研究者集団を形成しなければならない。第二に、比較的多くの、一定の水準を備えた東干族を研究した科学研究の成果を出版しなければならない。第三に、東干族を研究する科学研究機関を設立しなければならない。第四に、東干族の研究について国際学術交流を進展させなければならない。先の世紀50年代前半、ソ連ではまさにこれらの条件が備わっていた。1953年ソ連は東干族のためにキリル文字を基礎とした東干文字を制定した。1954年、ソ連キルギス共和国科学アカデミーに、元々あったチュルク語、東干族研究室を基礎に、東干学分部（研究所に相当する）が設立された。この時初めて「東干学」という語が使われた。1955年、ソ連の言語学者 G. P. Serdyuchenko 教授が招きに応じて我が国で学術講演を行ったときも、「東干学」という語を使っていた。

我が国の東干族についての研究は、やや遅れて始まった。1955年、ソ連の学者 G. P. Serdyuchenko が招きに応じて我が国で学術講演を行う以前には、王均教授がモスクワを訪問したとき、ソ連科学アカデミー東方学研究所の東干族学者 A. Kalimov（カリ莫夫）と東干語問題について交流を進めたこと、中国文字改革委員会の杜松寿氏が『ピンイン文字研究参考資料：東干語ピンイン文字資料』を翻訳整理したことがあるだけである。なお、杜氏の書は非常に学術的に価値のある資料である。1956年、民族出版社はソ連の学者 G. P. Serdyuchenko の『民族文字制定と標準語設定の問題に関して』を翻訳出版した。この書の122～125ページで特に「東干文字の字母」を紹介している。この後、中ソ関係に大きな変化が発生した<sup>10)</sup>ため、東干族の研究を継続することもできなくなった。

ここ何年かのうちに、いくつかの東干族を研究した論文が発表された。王国傑教授、丁宏助教授、海峰助教授、楊峰氏、趙塔里博士らは彼らの論著を出版あるいは発表し、郝蘇民教授らは著名な東干学者 M. Susanlo（蘇尚洛）の著作を翻訳出版した。更に多くの研究者が中央アジアへ行き、東干族についてのフィールドワークを進める予定である。

中央民族大学は、これまでの研究基盤の上に、更に東干族についての研究を強化し、国内外の関係機関、団体及び研究者との間の協力交流を進展させ、中国各民族人民と中央アジア各国人民の間の伝統的な友情を増進するために、1999年1月15日、東干学研究所を設置した<sup>11)</sup>。研究所は以下の各項目を近い将来実施すべき活動として列記する予定である。

- (1) 国内の関係部門、団体及び研究者との連携を密にし、国内に向けて国外の東干学関係の情報を紹介し、協力して、東干学の研究活動を行う。
- (2) 中央アジアのカザフスタン、キルギス、ウズベキスタンの三国の東干協会、キルギス国家科学アカデミー東干分部、雑誌『東干』などの東干語メディアとの連携を保持し、

- 不定期に東干学関係の国際研討会を共同で開催するよう努める。
- (3) 国外の既に出版された東干学関係の著作を選び、国内で翻訳出版を行う。
  - (4) 国外に向けて我が国の東干学を研究する著名な学者と著作を推薦、紹介する。
  - (5) 大学内外の東干学に関する教学の任務を引き受け、各方面の大学院生及び進修生<sup>12)</sup>を指導する。
  - (6) 東干学研究に従事することを希望し、その必要がある、関係国家機関、関係大学などの研究機関のために、一定の情報提供サービスを行い、また双方の仲立ちをして、訪問の企画を行う。
  - (7) 研究経費を調達する。

## 注

- 1) 本稿は、『语言与翻译』2004年第1期頁12 - 14に掲載された胡振华「关于『东干』、『东干语』、『东干人的双语』和『东干学』」の日本語訳である。2004年3月、胡振华教授宅を訪れた際、この論文を日本語に翻訳し、日本の研究者に紹介するよう依頼を受けた。なお、訳文中に用いられている括弧( )内の注記は、人名、地名の漢字表記を除き、著者によるものである。題名に付けられた原注は、\*で示した。
- 2) 胡振华教授は、1931年中国山東省青島市に生まれ、1953年中央民族学院(現在の「中央民族大学」)語文学部ウイグル言語文学系を卒業後、中央民族学院でキルギス語学文学、チュルク諸語言語学、中国イスラム文化等の教育と研究に従事し、中央民族大学少数民族語言文学学院教授(博士生导师)を長年務め、2004年冬退職(離休)した。現在、中国突厥語研究会副会長、中国少数民族双語教学研究會顧問などを務め、國務院發展研究中心欧亚社会發展研究所研究員、キルギス共和国国家科学科学院名誉院士、キルギスビシュケク人文大学客員教授である。
- 3) 当然、中華人民共和国のことである。
- 4) 「回族」は、中央アジアのイスラム教徒に起源する民族で、長い年月にわたる漢民族との接触により漢化し、言語も漢語を用いている。イスラム教を信仰している。中国全土に分布し人口は約860万人である。1862年西安で回族の人々が多数虐殺される事件をきっかけに、回族の人々が中国西北各地で清朝に対して反乱を起こした。しかし、清朝軍が1878年までにイリを除く新疆全域を制圧し、反乱は終わった。反乱の末期、一部の回族の人々は清朝軍に新疆を追われて、ロシア領に逃亡した。(張承志『回教から見た中国』中央出版社1993年、頁87 - 90参照)
- 5) 橋本萬太郎は「東干語を尋ねて(1) - 東干語の声調と音韻分析の現実性 - 」(『月刊 言語』第6巻第4号頁96 - 104)において、東干人は、かつて「ジュンヤン(中原)」と自称していたが、1958年以降、「ホエイズウ(回族)」と自称している述べている。
- 6) 1917年11月(ロシア歴10月)、レーニンの指導の下、ボリシェヴィキが起こした武装蜂起が全国に波及し、ケレンスキー臨時政府を崩壊させ、ソビエト政権が樹立された革命。
- 7) 中国には、ウイグル(維吾爾)語、カザフ(哈薩克)語、キルギス(柯爾克孜)語、ウズベク(烏孜別克)語、タタール(塔塔爾)語、サラ(撒拉)語、西部ユグル(裕固)語などのチュルク語族の言語が話されている。
- 8) 原文は「東干話」である。「話」は地名と共に起る場合は「その地域で話されていることば」のことであり、「言語」、「方言」と訳される場合が多い。訳者も先に「陝西話」、「甘肅話」をそれぞれ「陝西方言」、「甘肅方言」と訳している。しかし、ここでは著者の指摘に従って「東干人のことば」と訳した。

- 9) 現在の「中央民族大学」である。
- 10) 1956年フルシチョフのスターリン批判を契機として、中国とソ連のイデオロギー論争が始まり、その後、政治的、軍事的対立へと発展した。1960年には、ソ連が中国への援助を打ち切り、約1,400名の専門家を撤収し、12件の政府間協定と数多くの科学技術プロジェクトを破棄した。
- 11) 著者が初代の所長を務めている。
- 12) 日本の大学における科目等履修生、聴講生に相当する。

キーワード：東干語 東干学

( Hu Zhenhua / INUZUKA Yuji )